

「九条の会さかど」ニュース 2023年9月28日 第136号

<https://9jo.jp/sakado> sakado@9jo.jp 連絡先 049-282-4968(小林)

再開します！戦跡めぐり

ご存知ですか？坂戸に飛行場

核兵器禁止条約の国連採択を励まし続けてきたのが、ヒロシマ・ナガサキの物言わぬ戦争遺跡たちでした。

「平和都市宣言」を採択している坂戸市にも、たくさんの戦争遺跡が残されています。

良質な畑作地が一夜のうちに強制収用され、建設された陸軍坂戸飛行場。戦後、朝鮮戦争の激化による米軍基地化を阻止した開拓農民の団結。桜並木は、平和への願い…。

学びの秋の「戦跡めぐり」で、郷土坂戸の戦中・戦後を学びましょう。以前参加した人にも、新たな発見が待っています。お誘いあわせてご参加ください。

4年ぶりに戦争を語り継ぐ会

コロナ禍で中止を余儀なくされていた「戦争を語り継ぐ会」を4年ぶりに再開しました。同じ階で開催されていた「原爆絵画展」を通じての参加もありました。



今回の語り継ぐ会では、

今年の語り継ぐ会では、昨年10月号で新島から漁船で疎開した体験を記した柳町の鈴木傳次郎さんが、その中では紹介していなかったエピソードや現在の政治の有様について

考えていることを様々の資料を示しながら語られました。視点を変えた原稿として届いていますので、今後のニュースで紹介します。

市民活動フェアの現場から(後編)

西坂戸 大山 茂

フェア当日の会場にて

入西地域交流センターが会場ということで、どれだけの参加者がいるのか不安でした。それでも、九条の会さかどのブースには、80名ほどの人が訪れてくれました。

先ず聞いたのは「坂戸に陸軍の飛行場があったのを知っていますか？」でしたが、半分は「知らなかった」でした。「なんとなく聞いたことがある」という人も多く、「はっきり知っています」と答えたのは千代田周辺に住んでいる人くらいでした。

訪れた人に、「坂戸市の千代田周辺は関東ローム層の広い平地が広がっていたので飛行場に向いていると陸軍が目をつけ、ソ連との戦争を想定して、農民から土地を奪い取り、瞬く間に飛行場を建設したこと。戦後の米軍基地化を住民たちが拒み、工業団地と住宅地として開発がされたこと」を説明していくと、どの人も感心していました。

九条の会さかどの取り組みの成果や市民活動フェアの意義を、あらためて感じさせられました。

現在の坂戸市の地図の中に飛行場跡を明示するなど展示方法を改善し、戦跡めぐりのいっそうの充実をはかっていきたいと思います。(終)

大空襲の記憶は消えず

清水町 鈴木芳枝

当時9歳だった私は、3月9日夜から10日にかけてのあの東京大空襲を、今でも忘れることはできません。

9日夜、いつものとおり家の床下の防空壕に避難していましたが、そこが安全でないと父親に手を引かれ小学校へと移動しました。あちらこちらに激しい火の手があがり熱風も吹き荒れ、軒下の自転車がバタバタと倒れていました。3歳年上の兄と母は別校区の学校へ避難していきました。

恐ろしさと不安を抱えながら朝を待ちましたが、その間にも学校の屋上では、カラコロと乾いた音が響きました。それは焼夷弾が落とされた音だったのでした。朝になり、町全体が焼け野原となり、まだくすぶり

坂戸の戦跡めぐり

日時 11月25日(土曜日)13時30分～16時
集合 坂戸中央公民館3階学級室C(解散も)
内容 弾薬庫や被爆アオギリ、陸軍の標石、ペトンなど、市役所周辺の陸軍坂戸飛行場の戦跡を歩きます

が残る道を我が家へと戻りました。家は何ひとつ残っておらず、子供心にも呆然としました。

母や兄と再会できて何よりでしたが、食べる物がありません。母がマンホールの中に入れておいた鍋に昨夜の残り物の味噌汁がわずかに残っていただけでした。

その後、兄と私は父に連れられて、嫁いでいった長姉の家に避難することになりました。子供のいない姉の家での暮らしは、かなり苦痛に思いましたが、更に遠方の親戚に疎開することになりました。父の姉が桶川に居り、その伯母を頼りの縁故疎開です。

交通事情も厳しく、最寄りの鶯谷駅からは大宮駅までしか乗れず、大宮から桶川の伯母の家までは歩きのみでした。

ヘトヘトに疲れて泣きながら歩き、やっとたどり着いて家に入った途端、パターンとあがりまちに体を投げつけていました。

今思えば、いかに戦時中とはいえ、私たち兄弟を預かることはどんなに大変なことかと改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

【9条バトンリレー(9)】

原発問題と私

薬師町 鶴澤 洵

私が長らく勤めていた特殊法人理化学研究所に樋田敦さんが居た。最初の出会いは樋田さんが理研労の執行委員長になってからだった。樋田委員長の的確な追求で給与表の書き換えまで追い込んだが、撤回した。

これを不当として埼玉地方労働委員会に不当労働行為申し立てを行なった。撤回の背景に、大蔵省からアップ率(基準内給与×%)を「内示」=指示があることがわかってきた。特殊法人労組には労働三権が補償されているが、「内示」によって団交権が形骸化されていたのである。埼玉地労委では「内示」に団交権を妨げる拘束力は無いとした。

闘いは中央労働委員会に移ったが、ここでも組合勝利となった。この時、ある主任研究員は「樋田は組合問題をやっていた方が良い」と言ったという。原発問題を本格的に取り組むことを恐れたのであろう。果たして、樋田さんは単行本執筆や雑誌への投稿で「反原発」を訴え始めた。当時は核の平和利用が大多数意見だった時代である。しかし、スリーマイル事故がありチェルノブイリ事故もあって空気は変わってきたが、日本政府と原子力学者は「あれは日本の原発とは形式が違う、安全である」と逃げるばかりで原発建設の道を邁進した。

私は労働委員会闘争にも深く関わり、樋田さんとは大いに議論もし、共に闘ってきたので、その鋭さと先見力、実行力は評価していた。樋田さんの著書はほとんど贈呈を受けて目を通してきた。世界でも最初に原発の危険性を指摘し、放射線による直接的な被害ばかりでなく、核廃棄物の長期におよぶ管理の問題と廃熱による地球温暖化に警告をしていた。

これは「石油は枯渇が問題ではなく、廃熱が問題」と同時に展開された。このような主張に対して、科学

技術庁からの介入は凄まじく、何かに付けて樋田懲戒の動きがあったが、労働組合を中心に防いできた。故高木仁三郎さんや反原発派の方々の支援に駆けつけてくれた。

理研内部にも、先に挙げた主任研究員などもおり、「どっちもどっち」という態度をとる者も居た。最先端を歩む者の常として勇み足もあって反発も多かったが、本質的には現在の原発問題や環境問題を予言していたと言ってよい。

今も本質的に変わらないが、原子力の危険性を訴える研究者は干され、推進派と「何とかなる」派には研究予算を付ける様を見せつけられてきた。

日本政府もマスコミも3.11の教訓を封印しているようだ。放射性処理水の廃棄問題をみれば、中国や北朝鮮の反発ばかり大きく報道し、原発の本質から目をそらせようとしている。IAEAのお墨付きをもらい、日米韓の首脳会談を経て実施を宣言した。排水はいくら海水で薄めてもストロンチウムやセシウムの絶対量が減ることはなく、太平洋に拡散するだけである。

8月23日の海流図(海上保安庁)によれば宮城県沖では暖流が大きく円を描いている。銚子沖では寒流が小さな円を描いている。海流は複雑で少し沖合に流せば安全とは言えないのである。日本沿岸ばかりでなく、領海外へと拡散するのである。

また「生物濃縮」という問題もあるが、マスコミは一切報道してない。もっぱら「風評被害」で漁民や地域の人が困っているとの報道がなされている。

さて「風評」とは何だろう? 『広辞苑』(1966年)によれば世間の評判、うわさ、とりざた、風説とある。これは関東大震災の時に、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などのうわさが流れて、直ちに自警団が結成され、憲兵隊の先棒をかついで多数の朝鮮人を虐殺した100年前の歴史がある。これは全くの「風説」であった。

しかし、原発の危険性は風説ではない。放射線を発する核の種類によっても大きく違うが危険なものは少量でも危険である。この処理水排水と原発再稼働はリンクしているのである。今、残っている処理水をカラにして新たに再稼働して溜まる処理水を入れるためである。

現在を生きる者の「豊かな生活」をするために、その解決を未来に押し付けてはならない。「科学の進歩が何とかしてくれるだろう」という人が居たらマユツバで聞いて欲しい。何とかならないのである。科学と技術を甘く捉えてはならない。

放射能汚染水放出を「反中国」「反北朝鮮」の感情で判断してはならない。「風評被害」という「新語」に惑わされて批判をゆるめてはならない。危険なモノを危険という人を異端者とし、危険なモノを「危険でない」と論陣を張ったり、議論を逸らす者を優遇する風潮は変えていきたい。(次回は成願寺の小川未奈子さんに)

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

10月23日、11月27日、12月25日(第4月曜日14時~16時)
会場は坂戸市役所に隣接した勤労女性センターロビー。